日本臨床外科学会　国内外科研修報告

兵庫医科大学炎症性腸疾患外科における研修を終えて

島根大学消化器・総合外科
石飛　一成

私は島根大学卒後12年目で，現在，島根大学医学部消化器・総合外科の下部消化管グループで大腸疾患を担当しています．2025年６月にはda Vinci Console SurgeonのCertificateを取得し，ロボット手術を中心に日々研鑽を重ねています．

近年，潰瘍性大腸炎およびCrohn病を二大疾患とする炎症性腸疾患の患者数は増加の一途をたどっています．もはや希少疾患とは言えない状況ですが，高齢化率が34.7％に及ぶ高齢化先進県である我が島根県においても，日常臨床で目にする機会が多くなっています．加えて，既存患者の高齢化や高齢発症例も増加の一途をたどっており，臨床的課題は多種多様，複雑化しています．

このような状況から，炎症性腸疾患外科での学びの機会を得たいと考え，2025年度日本臨床外科学会国内外科研修に応募し，国内有数の症例数を誇る兵庫医科大学炎症性腸疾患外科にて2025年９月29日から10月10日までの２週間，貴重な研修をさせていただきました．

兵庫医科大学病院は阪神電鉄「武庫川駅」西出口より徒歩５分の好立地にある大病院で，2026年秋には新病院棟の開院が予定されています．研修期間中は手術見学を中心に，毎朝８時30分から始まる教授回診，週１回開催される炎症性腸疾患外科と炎症性腸疾患内科の合同カンファレンス，外科系講座（炎症性腸疾患外科，上部消化管外科，下部消化管外科，肝・胆・膵外科，乳腺・内分泌外科，小児外科，心臓血管外科，呼吸器外科）の合同カンファレンスに参加させていただきました．また，腸管吻合部や回腸嚢を評価するために自科で実施する造影検査や内視鏡検査，内野　基教授の外科外来に同席させていただきました．

手術症例数は予定手術10例，緊急手術１例の計11例と，非常に充実した２週間を過ごすことができました．潰瘍性大腸炎に関しては，high-grade dysplasiaに対する腹腔鏡下大腸全摘回腸嚢肛門吻合術＋人工肛門造設術のほか，直腸癌に対する国産ロボットシステム「hinotori」を用いたロボット支援下大腸全摘回腸嚢肛門管吻合術＋人工肛門造設術，回腸嚢肛門管吻合術後の難治性痔瘻に対する腹腔鏡下回腸嚢切除術などなど，高難度の貴重な手術を見学することができました．Crohn病に関しては，狭窄病変に対する腸管切除術や痔瘻に対するダルバドストロセル投与などを見学し，症例ごとの個別性を踏まえた対応の重要性を学ぶことができました．

一方，吻合法についても学ぶ機会がありました．近年は自動吻合器の性能向上により機能的端々吻合（FEEA）法やoverlap法などの器械吻合が主流となっていますが，定型化されスピーディーに進められるAlbert－Lembert法による手縫い吻合の技術には感銘を受けました．

外来診療においては術後管理，特に潰瘍性大腸炎術後の回腸嚢炎に対する長期的なフォローアップの方法について，非常に多くの示唆を得ることができました．

また，医師の働き方改革が求められる現代において，３人１組，２チーム制による効率的な手術や病棟業務も印象的でした．タスクシフトやタスクシェアが円滑に行われ，チーム全体で臨床業務を支える姿が印象的でした．

今回の研修を通じ，炎症性腸疾患外科治療の最前線に触れることができました．また，炎症性腸疾患外科診療の先駆者としての自負を持った近しい世代の先生方と過ごすことができ，大きな刺激になりま

した．２週間という短い期間ではありましたが，非常に貴重で学びの多い機会となり，自身の成長に対する大きな糧となりました．

末筆ながら，日本臨床外科学会の万代恭嗣会長，国内外科研修委員会の高山忠利委員長をはじめ，関係者の皆様に心より御礼申し上げます．また，研修中ご指導くださった兵庫医科大学炎症性腸疾患外科の池内浩基教授，内野　基教授，堀尾勇規講師，桑原隆一講師，楠　蔵人助教，長野健太郎助教，友尾祐介先生，野村和徳先生に深く感謝申し上げます．また，今回の研修をご推薦いただいた当院Acute Care Surgery講座の渡部広明教授，ご支援くださった当科の日髙匡章教授，山本　徹准教授，下部消化管グループの諸先生方に厚く御礼申し上げます．

左から）楠先生，長野先生，桑原先生，内野先生，池内先生，筆者，友尾先生，研修医・学生の皆さん